

電撃戦理論の成立

— 軍事理論と政軍関係からの考察 —

吉本隆昭^{*1}

Establishment of Blitzkrieg Theory

— From the Viewpoint of Military Theory and Civil-Military Relations —

Takaaki YOSHIMOTO^{*1}

Abstract

After being defeated in World War I, Germany developed Blitzkrieg, one of the most successful military operational theories, in order to be ready and victorious in the upcoming war with the allied forces. The theory basically comprehends the idea of fast maneuver of armored troops, consisted of tank troops as the core, mechanized infantry troops, self-propelled artillery, and other supporting troops. As a matter of fact, by such theory, Germany defeated France within a month.

This piece of thesis explains how the theory had been established and makes the theory clear, not only from the military perspective, but also from the viewpoint of civil-military relations between Nazi leadership and German military.

はじめに

電光石火の早さと打撃力で敵を撃破して、戦争を短期間で勝利に導く「電撃戦」という言葉は、今日でも耳にするが、そもそも「電撃戦 (Blitzkrieg)」は、何時、何処で、どのように誕生したのであろうか。すでに第二次大戦以前にドイツで軍事用語として使われていたが、この言葉が全世界に知れ渡ったのは、1940年5月にドイツが電撃戦でフランスを短期間に破ったことに因る。

電撃戦は、4年に亘る長期持久戦となった第一次大戦に敗北したドイツが、次の戦争では短期決戦で勝利するために、世界に先駆けて採用して実

行した作戦構想（作戦戦略）である。その構想は、第一次大戦で初めて出現した戦車等の新兵器を中核に据え、空軍による対地支援、空挺作戦、装甲部隊による機動戦を組み合わせた迅速、かつ強力な打撃力を有する今までに無い全く新しいものであった。ドイツはこの構想の下で、第二次大戦前半の諸作戦で勝利し、電撃戦は、第二次大戦を特徴付ける作戦構想となった。

本論文は、「電撃戦 (Blitzkrieg)」とは如何なる構想かを明らかにして、この構想の誕生の経緯を遡り、第二次大戦前半に実施された諸作戦：対ポーランド戦（1939年）、対フランス戦（西方作戦：1940年）、対ソ戦（バルバロッサ作戦：1941年）を検証して、この構想が出現した背景と成立

*1 日本大学国際関係学部国際総合政策学科 教授 Professor, Department of International Studies, College of International Relations, Nihon University

過程を軍事的観点のみならず、ドイツ第三帝国の政軍関係の中で探るものである。

1 電撃戦とは何か

第一次大戦で、ドイツの対仏機動戦は失敗し戦線は膠着して長期の陣地戦になり、遂には4年間に及ぶ国家総力戦に陥って敗れた。そこでドイツ軍部は、次の戦争で勝利を得るのは高速機動戦による短期決戦であると確信し、その結果誕生したのが「電撃戦」構想であった。

「電撃戦」とは、戦車を戦力の中核に据えて、機械化歩兵、自走化砲兵、その他の支援部隊で構成される機動部隊《装甲部隊》による敵陣深く高速で行う突進と空軍（特に急降下爆撃機）による対地支援（機動部隊の前進を妨害する敵の反撃、防御施設、砲兵部隊等の破碎）を組み合わせた作戦構想であり、それによって、従来では考えられない高速機動戦が可能になった⁽¹⁾。

装甲部隊による機動戦構想は、第一次大戦末期にドイツ陸軍が採用した「突撃隊戦術 (Sturmabteilungstaktik)」に由来し、戦後英国のリデル・ハートやフラーによって理論的に深められ、やがて、それはドイツ軍部の注目する所となった。

さらに地上での装甲機動戦を空から支援する構想は、エルンスト・ウーデットを中心とするドイツ空軍によって、急降下爆撃機 (Stuka) の威力と対地支援の有効性が示され、さらに1936 - 39年のスペイン内戦における実戦試験によってその有効性が実証された。こうして装甲部隊の突進と空軍の対地支援を組み合わせた「電撃戦」構想が誕生した⁽²⁾。

電撃戦の一般的な実施要領は次の通りである。まず空軍により敵の前線飛行場、指揮中枢等の重要施設に対して先制奇襲攻撃を行なう。この攻撃により敵空軍は地上で撃破され、制空権は我に帰し、それ以降我が空軍は地上部隊の支援に専念できるようになる。これが「航空撃滅戦」である。これとほぼ同時期に、地上部隊の予定進撃路上の重要橋梁、前進を妨害する要塞等の障害を空挺部隊が落下傘降下あるいはグライダーにより奇襲攻

撃して奪取し、地上部隊の迅速な前進を可能にする。これが「空挺作戦」である⁽³⁾。次に、敵主力の防御陣地に対して砲兵の攻撃準備射撃を行い、歩兵部隊が敵主力陣地に対して攻撃を開始して敵主力を陣地に拘束する。その間、敵の配備の弱点に対して急降下爆撃と砲兵火力を集中して、装甲部隊の前進のための開口部、即ち突破口を形成し、そこを突破した装甲部隊は敵後方の重要地域に突進する。その際、作戦重点 (Schwerpunkt) を形成するために装甲部隊を集中使用する。装甲部隊に後続する歩兵部隊は、突破口を拡大し、敵主力陣地を側面より攻撃する。装甲部隊は、敵の抵抗を排除しつつ、敵の弱点を追求して空挺部隊の確保した前進路を前進するが、すでに敵によって橋を破壊された箇所では、随伴した戦闘工兵の支援によって渡河する。敵の抵抗があれば渡河攻撃を敢行して前進を継続する。敵の反撃に遭遇した場合は自隊で対処するが、その能力を超える場合は、空軍に対地攻撃を要請して敵の反撃を破碎する。敵陣の深部へ進撃した装甲部隊は、敵後方の指揮、兵站中枢に突入して破壊する。敵の指揮・通信組織は分断され兵站機能も麻痺して、敵は戦闘能力を喪失する。その後、地域の確保は後続の歩兵部隊に任せて装甲部隊はさら後方の目標に向かって前進を継続する⁽⁴⁾。

電撃戦が成功する条件は、迅速な攻撃速度の維持にあり、装甲部隊指揮官は、部隊の先頭で柔軟かつ積極的に指揮を行い、不測の事態に迅速に対処しなければならない。それを可能にするには、部隊の指揮権を分権して各級指揮官により大きな自由裁量の余地を与えなければならない。そこでドイツでは、「委任戦術 (Auftragstaktik)」と呼ばれた指揮方式が採用され、部隊指揮官に大きな権限が与えられていた。また空軍部隊と連絡するために、空軍連絡将校が無線機を搭載した装甲車に搭乗して地上部隊に同行して急降下爆撃機に目標を指示した。この対地支援の指揮連絡方式は、今日でも世界中の軍隊で採用されている先進的システムであった⁽⁵⁾。

2 電撃戦の起源と確立

(1) 国民のモータリゼーション

ドイツ第三帝国の指導者になるアドルフ・ヒトラーは、既に1920年代に次の戦争の死命を制するのは、軍のモータリゼーションであると考え、彼の著書『わが闘争 (Mein Kampf)』の第2部で、この分野でのドイツの立ち遅れを指摘していた⁽⁶⁾。しかしながら、ヒトラーが指摘した軍のモータリゼーションは、軍の動員及び戦略展開時の自動車輸送と軍の兵站輸送部門の自動車化を指したものであった。

ヒトラーのモータリゼーションは、政権獲得後、まず国家全体の、すなわち一般国民のモータリゼーションをもって開始された。元々自動車に大いに関心のあったヒトラーは、政権獲得直後の1933年2月、ベルリンのモーターショーの開会式で、自動車は一部の特権階級の物ではなく広く一般国民のものであると述べ、国民の為の自動車の開発と自動車専用道路（アウトバーン）の建設を明らかにした⁽⁷⁾。

ヒトラーは、1933年末国民の為の自動車の開発者として、メルセデス・ベンツの開発者として有名なフェルジナント・ポルシェ博士を選び、国民車（フォルクスワーゲン）という名の国民大衆車を開発して廉価でドイツ国民に供給すると約束した。ヒトラーはさらにポルシェ博士に国民車開発の5条件として、4-5人乗り、最高時速100km/h、空冷エンジン、燃費11.7km/l、価格1,000マルク以下を示した。ヒトラーは、国民車開発をドイツ労働戦線（DAF）に支援させることにし、1937年5月に国民車準備会社を設立させ、翌1938年5月には、生産工場を建設した。同年8月にDAFは、国民が毎週5マルクを積み立てて4年後に国民車を受け取ることができる予約積み立て制度を創設した。その結果33万6千人の労働者が合計2億6千万マルクを積み立てたが、第二次大戦の勃発によって国民車計画は中止となった。しかしながら、フォルクスワーゲンの生産施設では、フォルクスワーゲンをベースにした軍用車VW82（キューベルワーゲン）が約7万台生産され、ドイツ軍のジープとして全戦線

で活躍した⁽⁸⁾。

アウトバーンは、1920年代から建設計画が進められていたが、ナチスの政権成立によって国家規模での本格的なアウトバーン建設が計画された。ヒトラーは1933年6月27日、ユリウス・ドルプミュラーを長とする帝国自動車庁を創設して、アウトバーン建設計画の立案を命じ、6月30日には土木技師のフリッツ・トート博士を道路総監に任命して、アウトバーン建設機関を組織させた。アウトバーンは、全幅24m、4車線、路面のコンクリート厚20cm、最高速度は無制限の本格的で近代的な自動車専用道路であった。計画では、6路線、全長6,900kmであったが、この内3,000kmが1938年末までに完成した。戦争の開始により計画途中で中止となり、国民のモータリゼーションには活用されなかったが、完成したアウトバーンは、ドイツの戦争遂行のための戦略道路として活用された⁽⁹⁾。

さらにヒトラーは、モータリゼーション実現のために操縦者の養成にも着目し、1931年4月20日にナチ突撃隊（SA）内にアドルフ・ヒューンラインを長とする国家社会主義自動車団（NSKK）を創設した。NSKKは、自動車操縦技術の普及と予備ドライバーの確保の為に急速に発展し、設立当初約1万名であったメンバーは、最終的には50万名に達し、軍にドライバーを供給した⁽¹⁰⁾。

(2) 軍の自動車化

第一次大戦後のドイツ国防軍指導部では、先の大战でドイツ陸軍が運動戦を企図しながら、戦線が膠着し長期損耗戦の末、力尽きて敗北した教訓から、軍の自動車化に注目して研究を進めていた。

当初の関心は、戦線後方での兵站輸送に自動車を使用するという点にあった。その実例は第一次大戦中に多く存在したが、それらは固定した戦線後方における自動車による兵站輸送に止まり、ドイツが次の戦争で企図する機動部隊による流動的な運動戦における自動車兵站輸送の実例ではなかった。そこで敗戦後のドイツで陸軍参謀本部の役割を果たしていた国防省軍務局と交通兵監部が兵棋演習と実員演習を重ねて、その有効性と問題

点を研究した。その結果、固定した戦線後方での大規模な自動車輸送は可能で有効であるが、運動戦に際しては不可能であるとの結論に達した。その理由は、固定した戦線では第一線に展開した師団の車両、馬匹も後方の兵站輸送に利用でき、砲兵部隊でも自隊の機動に車両、馬匹を使用する必要がないので後方からの弾薬輸送に利用できる。第一次大戦ではヴェルダンの戦いでフランス軍がそれを証明した。しかし、運動戦では自隊の機動に大量の車両を必要とし、その部隊に対する推進補給にも大量の車両を必要とした。さらに後方においても兵站輸送のために大量の自動車を必要とした。それを実行することは、当時の軍と民間の自動車保有数から判断して不可能であったのである⁽¹¹⁾。

そこで考えられたのが戦闘部隊自身の自動車化であった。それによって戦闘部隊の機動力が大幅に向上するのみならず、戦闘部隊は自隊が保有する自動車で移動するので補給活動を圧迫せず、独立した自動車部隊を後方の兵站輸送に使用できる⁽¹²⁾。

戦闘部隊の自動車化は、装輪輸送車両の機動力に限界があり、やがて次の段階の戦闘部隊の戦車や装軌装甲輸送車両による装甲化を考えることになる。しかし、当時のドイツはベルサイユ条約によって戦車の保有が禁止されていたために、戦車の運用研究は当時欧州各国で行われていた成果を活用した。特にイギリス軍の研究と運用教範を活用し、ドイツでは模擬戦車、あるいは装輪装甲車を使った実員演習によって研究した。その際中心的役割を担ったのが、ドイツ装甲部隊の父となるハインツ・グデーリアン少佐であり、戦車の運用研究は1928年頃には、分隊から、小隊、中隊、大隊規模へと進んでいた。さらにスウェーデン軍の協力の下で戦車の技術的研究と運用研究が行われた。1929年には装甲車両の運用理論は、歩兵の火力支援のために戦車を運用するのではなく、戦車を戦力の中核にして、歩兵がそれを支援し、砲兵にも戦車と同等の機動力を持たせた諸兵種連合部隊から編成される装甲師団を創設する構想に到達していた⁽¹³⁾。

この理論の形成に大きな影響を与えたのは、イ

ギリスのバジル・リデル・ハートの機械化論とJ.F.C.フラーの装甲機械化部隊による機動戦理論であった⁽¹⁴⁾。

リデル・ハートは、イギリスの今世紀を代表する軍事理論家の一人であり、1927年に発表した『近代軍の再建』で、第一次大戦における陣地戦による西部戦線の膠着とその結果生じた大量の損害を教訓として、「将来の戦いは、戦車を大量に集中使用する機動戦を基本とし、攻勢作戦によって戦争の勝敗を一気に決すべきである。その為の攻撃目標は、敵野戦軍主力ではなく後方の指揮通信中枢であり、この攻撃により敵の継戦意志は粉碎され、最少の兵力、損害で戦争目的を達成できる」と主張した。また航空機の有用性にも注目した。この新しい考えは、伝統重視のイギリス軍には受け入れられなかったが、ドイツ軍部に大きな影響を与えた⁽¹⁵⁾。

J.F.C.フラーは、サンドハースト陸軍士官学校出身の英陸軍軍人で、第一次大戦で新しく編成された戦車集団を指揮して成功を収め、戦後、少将で退役して軍事問題の研究と著作に専念していた。

フラーは、自身の戦車部隊運用の経験を基に戦車の有効性を主張し、やがて戦車が軍の中心的兵器となると主張した。何故ならば、戦車の性能が向上することにより、将来戦車の戦場におけるダイナミズムは革新的に増大し、歩兵、砲兵は補助兵種として戦車を支援するようになるかと予測したからである。さらに、戦車によって戦場での運動力は画期的に向上し、ヨーロッパ全地域の75%を作戦可能な地域に変え、従来の道路、鉄道、動物の力に頼った戦争形態を一変させると考えた。その結果招来する近代的機械化部隊と従来の道路、鉄道に依存する部隊との戦闘は、近代的鋼鉄艦と帆船との戦闘に匹敵し、その結果は明白であると主張した。それ故に、次の大戦では塹壕戦ではなく、機動戦による奇襲電撃戦こそが基本的軍事戦略になると考えた。この理論は、1927年夏にイギリス陸軍が行った演習において、自動車化部隊が徒歩歩兵部隊を完全に圧倒したことによって有効性が証明されていた。フラーは、1936年外国人として唯一人ヒトラーに招かれてドイツの装甲部隊演習を参観しヒトラーと意見を交換して

いる。彼の理論は、ドイツ軍の電撃戦理論の装甲部隊の編成と運用に大きな影響を与えた⁽¹⁶⁾。

(3) 装甲師団 (Panzerdivision) の編成

ドイツ国防軍は1929年夏の演習で、一方を装甲師団に想定した対抗演習を実施し、その成功で装甲部隊の有効性を証明したが、軍内保守派、特に騎兵の反発が強く、実際に模擬装甲部隊が演習に参加できたのは3年後の夏季演習であった。その演習の結果、装甲部隊の有効性は疑いの余地はなく、騎兵将校達も同意せざるを得なかった。このような時にヒトラー政権が成立したのである。国防軍では、親ヒトラー派のブロンベルク国防大臣とライヘナウ官房長が就任した。2人は軍の機械化に理解があったので、軍の装甲機動化に一層拍車が掛かった。

1934年2月に、軍の装甲化と電撃戦理論の誕生に決定的なことが起こった。それはヒトラーがクンメルスドルフにある国防軍兵器局兵器開発センターを視察したことである。グデーリアンには約30分間、装甲部隊の運用についてブリーフィングをする機会が与えられ、さらに戦車、対戦車、オートバイ各1個小隊による展示演習も行なわれた。それを見たヒトラーは、「これは使える。これこそ私が長い間望んでいたものだ」と何度も叫んだ⁽¹⁷⁾。ここに、ヒトラーが漠然と抱いていたモータリゼーションの考えと軍が進めていた戦闘部隊の装甲機動化の理論が完全に結び付いたのである。

(4) 装甲機動戦の準備

1934年6月、ナチ突撃隊の粛清 (レーム事件) と期を一にして国防軍にルッツ將軍を司令官、グデーリアンを参謀長とする自動車化部隊司令部が創設されたことは、ナチ党内及び国防軍内にあった人民軍構想が敗北、消滅し、装甲機動戦理論が勝利したことを象徴していた。8月にはヒンデンブルク大統領が死去し、ヒトラーはドイツ国家の元首である総統となり、軍事全権を掌握した。翌1935年3月、ヒトラーはベルサイユ条約の破棄、義務兵役制の復活、平時36個師団の編成を骨子とした再軍備宣言を発した。そして、その年の英

霊記念日の観閲行進では、大隊規模の戦車部隊が初めて登場した。しかし、これは再軍備実施の前提条件ができただけで、装甲機動戦を行うための装甲師団ができたことを意味していた訳ではなかった。自動車化部隊司令部は、数個装甲師団から成る装甲軍団の編成を目指したが、そのためには軍首脳に装甲師団の有効性と運用の可能性を納得させる必要があった。その実証のために、1935年夏、各師団内の戦車部隊を集めて演習装甲師団が編成され、その部隊による実員演習が実施された。これによって装甲大部隊による機動戦遂行の可能性が実証されたが、この演習にヒトラーを招待するという自動車化部隊司令部の計画は、ヒトラーの軍事補佐官の妨害によって実現しなかった。軍内には、依然として歩兵を軍の主兵とし、戦車はあくまでもその支援兵器にすぎないと確信する第一次大戦型の戦術思想に凝り固まった保守勢力は健在であり、その中心人物は、参謀総長のベック大将であった。この演習を利用してヒトラーに直接働きかけて、装甲軍団を装甲軍に昇格させようという目論見は失敗した⁽¹⁸⁾。

しかしながら、3個装甲師団の編成は軍の既定方針であったために順調に進み、1935年10月にはヴァイマル、ヴェルツブルク、ベルリンに装甲師団が誕生した。しかし、翌1936年には、保守派が巻き返しを図り、シュツツガルトに旅団規模の4個軽師団を編成して第15軍団を新設し、歩兵部隊の支援部隊として戦車を運用しようとした。さらにこの他に4個歩兵師団が自動車化されて第14軍団が編成され、ドイツ国防軍には、3個装甲師団から成る第16軍団を含んで運用目的の異なる3種類の機動部隊が存在することになった。しかも、この年の秋季大演習では、装甲部隊は連隊規模での参加が許されただけで、装甲師団の実力を示す機会は与えられなかった。しかし、翌1937年の秋季大演習には、ヒトラーも臨席して、大規模な機動演習が実施され、第3装甲師団が丸々1個師団参加して、装甲師団の威力を存分に発揮した。ヒトラーは、改めて装甲部隊による機動戦の有効性を実感したと思われる。その結果は、翌1938年2月の国防軍首脳の粛清とグデーリアンの中将昇進と第16軍団長への任命に現れ

ている。

1938年2月、ナチ親衛隊の策謀によって、国防大臣ブロンベルク元帥と陸軍総司令官フリッチュ上級大将が失脚したことにより、ヒトラーが軍への直接の統帥権を掌握し、カイテルを国防軍最高司令部総長として、最高司令部を実質的な個人的幕僚部とした。ヒトラーが本来の装甲部隊であるグデーリアンの第16軍団を最も信頼し期待していたことは、3月のオーストリア進駐を第16軍団の指揮下に、第2装甲師団に行なわせたことから分かる。ウィーンへの約700kmの行軍は、戦車のエンジントラブル、足回りの故障、燃料補給に苦しめられながらも成功し、装甲部隊の行軍能力が実戦に耐えられることを証明した。ヒトラー自身もウィーンへの途上それを直接確かめた。それでもボック上級大将をはじめとする高級将校達は装甲部隊の行軍能力に疑問を呈したが、ヒトラーが装甲部隊の能力に満足したことは、同年10月のズデーテンラント進駐と翌年3月のチェコ進駐が、第16軍団の指揮下で第1装甲師団と第13及び20自動車化歩兵師団で行なわれたことから推測できる⁽¹⁹⁾。

3 電撃戦の実行

(1) 対ポーランド戦

最初の電撃戦は、1939年9月1日、ポーランドに対して開始された。払暁ドイツ空軍、及び陸軍部隊は、ポーランド領内に侵攻を開始した。まずドイツ空軍が、第1、第4航空艦隊、総数約1450機（戦闘機約550機、爆撃機約880機、他）で、ポーランド空軍を制圧し、次いで鉄道、道路、橋梁、港湾、指揮通信施設等を爆撃、破壊した。ドイツ陸軍は、北方、南方の2個軍集団、5個軍（北方：第3及び4軍、南方：第8、10、及び14軍）の総計約45個師団が独-ポ国境と東プロイセンから出撃し、開戦初日に早くもポーランド側国境の第一線を突破した。ポーランド軍の中には頑強に抵抗する部隊もあったが、ポーランド軍の戦術、兵器は余りにも旧式で、開戦後約一週間でドイツ軍は、国境のポーランド野戦軍を分断、包囲した。

さらに詳しく見れば、北方軍集団の第4軍は、装甲部隊であるグデーリアン大将の第19軍団を中心に東へ突進し、ポーランド回廊を遮断して東プロイセンに到達し、東プロイセンの第3軍は南進してポーランド軍をナレフ河に圧迫した。シュレジエンから出撃した南方軍集団左翼の第8軍は、第10軍の翼側を掩護してポーランドの工業地帯ルージュへ突進した。ヘップナー大将の第16軍団を含む中央の第10軍は快進撃を続け一気に首都ワルシャワを目指した。右翼の第14軍は、カルパチア山脈沿いに東進し、さらに東方のブレスト・リトフスクを目指した。

開戦約2週間後には、ドイツ軍はワルシャワ西側で南北から第10軍と第3軍、西から第8軍と第4軍によりポーランド軍を包囲し、東方のブレスト・リトフスクではグデーリアンの第19軍団と第14軍が提携して、後退中のポーランド軍を捕捉した。こうしてドイツの二重両翼包囲は完成した。ここに至って、独ソ不可侵条約の秘密協定により東ポーランド獲得が保証されていたソ連は、9月17日、東ポーランドへの侵攻を開始した。これによりポーランドの命脈は完全に尽きた⁽²⁰⁾。

しかし、ワルシャワと北西のモドリン要塞は抵抗を続けたので、ドイツ軍は砲爆撃を強化し、遂に9月27日ワルシャワが、29日にはモドリン要塞が陥落した。ワルシャワに来ていたヒトラーは、プラガからワルシャワ爆撃の様子を観戦し、10月5日ワルシャワで戦勝観閲式を行った。こうして、ポーランド戦は、ドイツの圧倒的な電撃戦の威力によって一ヶ月で完全なドイツの勝利に帰した。

この対ポーランド戦に参加したドイツ陸軍部隊約45個師団の内、装甲師団は5個、自動車化歩兵師団は4個で、装甲機動の兵力は充分とは言えなかったが、装甲機動戦の威力は遺憾なく発揮された。早くも開戦4日目にグデーリアンの第19軍団司令部を訪れたヒトラーは、ヴィッスラ河畔で撃破されたポーランド軍砲兵部隊を見て、「ドイツ空軍の急降下爆撃機がやったのか」と尋ねた。これに対してグデーリアンは、「我が装甲部隊の戦果です」と答えた。ヒトラーは、この装甲

部隊の威力が彼の予想をはるかに超えたものであったので、驚愕した⁽²¹⁾。

(2) 対フランス戦（西方作戦）

ヒトラーは1939年9月、西方への攻勢を決意し陸軍首脳に準備を命じた。10月19日陸軍総司令部は、ヒトラーの指令に基づき、第1次西方（黄色）作戦訓令を指揮下の軍集団に発令した。その作戦目的は、オランダ、ベルギー及び北フランスに攻勢を行い、敵野戦軍を撃破して同沿岸地域に対英作戦用の海空基地を占領し、併せてルール地方の前方地域を確保するにあった。そのため北からB、A、Cの3個軍集団を並列し、主攻勢はB軍集団の第2、6、4軍をもってブリュッセルから北フランス沿岸地域に指向することになっていた。

しかし、A軍集団参謀長エーリヒ・フォン・マンシュタイン中将は、作戦目的が敵軍の撃破、海空軍基地の確保、ルール地方の安全の確保の三つであること、中でも地域の占領と敵野戦軍の撃滅を同時に命じていることに危惧の念を抱いた。さらにこの計画が、ベルギーを突破してパリを突く第一次大戦時の「シュリーフェン計画」の焼き直しに過ぎず、戦略的に誤りであると判断した。そこで10月31日、陸軍総司令部に対して主攻勢をA軍正面に変更する意見具申を行った。

11月に入りヒトラーは装甲部隊の準備不十分、陸軍総司令部との意志の疎通不良を理由に6回にわたって作戦を延期し、12月には天候不良を理由に4回延期し、作戦開始予定は、翌1940年1月17日になった。この度重なる延期はヒトラーの気まぐれからではなく、陸軍総司令部の作戦構想に対する不満によるものであった。ヒトラーは陸軍総司令部及び参謀本部の旧来の作戦理論に固執する考えを受け入れなかった。

一方マンシュタインは、12月18日に私案として西方作戦構想とそれに基づく作戦計画案を陸軍総司令部に提出した。しかし権威主義の陸軍参謀本部は、一軍集団参謀長の私案を認めなかった。ところが翌1940年1月10日にメヘレン事件が発生した。ドイツ空軍第2航空艦隊参謀が、西方作戦計画に基づく第2航空艦隊運用計画書を連絡機

で携行中にベルギー領内のメヘレンに不時着し、文書の一部がベルギー軍憲兵に押収されたのである。ヒトラーは、この事件を利用して西方作戦の全ての準備行動の中止を命令し作戦開始を延期した⁽²²⁾。

マンシュタインが最後の意見具申をしたのは、この時であった。A軍集団司令官フォン・ルントシュテット上級大将もマンシュタインの構想に同意して、この構想をヒトラーに伝達するように陸軍参謀総長に要請した。こうして1月30日にマンシュタイン構想を一部採り入れた第3次西方作戦訓令が発令された。しかし、マンシュタインの行動は、陸軍参謀本部の輦轡を買う結果となり、2月9日、彼は自ら熱望していた第1線の装甲軍団ではなく第2線の新編成の第38軍団（歩兵）長に左遷された。しかし、それが思わぬ結果をもたらした。2月17日、マンシュタインは5人の新任軍団長の一人としてヒトラーに謁見する機会が与えられた。マンシュタインの友人の前任陸軍副官シュムント中佐を通じてマンシュタイン構想を承知していたヒトラーは、マンシュタインを別室に呼び、その構想を詳細に聴いた。マンシュタインは、西方作戦の目的はフランス軍主力の殲滅であること、その為には作戦重点をB軍集団ではなくA軍集団に移し、アルデンヌを一気に突破して英仏海峡に到達すること、アルデンヌ突破には第19軍団のみならず可能な限り多くの装甲部隊を投入することを具申した。翌日ヒトラーは直ちに西方作戦に関する新たな指令を発し、それに基づいて陸軍総司令部は、2月24日、作戦重点をA軍集団正面に置き英仏海峡に突進する内容の最終西方作戦訓令を隷下軍集団へ発令した。こうして西方（黄色）作戦計画が完成した⁽²³⁾。

5月9日、ヒトラーは黄色作戦発動を下令、翌5月10日払暁、前年11月以来実に総計29回も延期された対ベネルックス・フランス侵攻作戦：西方作戦が遂に発動された。この作戦は、対ポーランド戦より完全な電撃戦理論に近いものであった。

西方作戦構想の核心は、強力な装甲部隊をもって大規模な部隊の通過は困難と考えられていたアルデンヌ森林地帯（ベルギー南部及びルクセンブルク北部）を突破して、ナムール～セダン間で

ミューズ（マース）川を渡河し英仏海峡へ突進して連合軍主力の退路を遮断することにあつた。しかし、アルデンヌの通過を困難と判断していたのは、仏軍首脳だけでなくドイツ軍首脳も同様であつた。ここを突破できればフランス軍の配備の弱点を突き決定的勝利を得られることに着目したA軍集団参謀長マンシュタイン中将は、ドイツ装甲部隊の父グデーリアン大将から装甲部隊のアルデンヌ通過は可能との太鼓判を得てこの計画を実現させた。この突破を担ったのは、A軍集団クライスト装甲集団麾下のラインハルト大将の第41軍団（第6、8の2個装甲師団）とグデーリアン大将の第19軍団（第1、2、10の3個装甲師団と大ドイツ歩兵連隊）であつた。

5月10日払暁、ルクセンブルク国境を突破した第19軍団は、第一線に第2装甲師団、第1装甲師団、第10装甲師団の3個装甲師団を並列し、その後方に軍団砲兵、司令部、高射砲部隊を続行させてベルギー国境へ突進した。11日には予め空中機動させていた大ドイツ連隊1個大隊と提携し、ニューシャトーのベルギー、フランス軍を撃破しブイヨンに到達した。12日には工兵の支援の下にスモア川を渡河して、同日午後にはセダン前面に達した。クライスト装甲集団司令官から「13日16時を期してマース川を渡河せよ」との命令を受領したグデーリアンは空軍の爆撃と砲兵の激烈な支援射撃により渡河に成功、15日には20kmまで橋頭堡を拡大、クライストの停止命令を拒否し、西へ大旋回して英仏海峡へ突進した。やがてドイツ装甲部隊はダンケルクに英仏軍の残敵を包囲し、ヒトラーの停止命令によってその殲滅は失したものの、ドイツ軍は6月14日にはパリに入城し、6月21日独仏休戦条約が調印されて対仏戦：西方作戦は、ドイツの勝利をもって終了した⁽²⁴⁾。

（3）対ソ戦（バルバロッサ作戦）

さらに大規模な本格的電撃戦はソ連侵攻で実行された。ヒトラーは、自ら総統指令第21号でソ連侵攻作戦「バルバロッサ」の構想を示し、陸軍総司令部及び陸軍参謀本部に対して作戦計画の立案を命じ、1941年6月22日午前3時、「バルバ

ロッサ」作戦が開始された。攻撃準備射撃の後、バルト海から黒海に及ぶ1,600kmの正面で、空軍の3個航空艦隊に支援された145個師団から成る3個軍集団、総兵力320万のドイツ陸軍東部作戦軍は独ソ境界線を突破した。

ドイツ東部作戦軍は、数日で国境付近のソ連軍を撃破し、7月初旬には各軍集団とも旧ソ連・ポーランド国境沿いにソ連が構築していた防御線であるスターリン・ラインを突破した。その後、北方軍集団は、バルト地域を前進し、8月下旬にはレニングラード郊外に到達して包囲したものの、膠着状態に陥った。

中央軍集団は7月中旬にはスモレンスクを占領したが、ヒトラーは当初の作戦計画を変更し、陸軍指導部及び東部作戦軍の反対意見も退けて、クリミア、ドネツ河地域へ戦略目標を指向するに決した。その為、第2装甲集団を南へ旋回させ、南方軍集団の第1装甲集団と共に、キエフ東方でソ連軍南西方面軍主力を包囲殲滅した。その後、再び主攻方向をモスクワに指向し、12月5日、第2装甲師団の先鋒は、モスクワに数十kmに迫ったものの中央軍集団の前進はそこで阻止された。

キエフ戦終了後、南方軍集団は第11軍をクリミア半島の攻略に当たらせると共に主力をロストフへ指向した。12月に至りクリミア半島の大部分は占領したもののセバストポリ要塞は陥落せず、翌年攻撃を再開した。また軍集団主力も11月末ロストフを一旦は占領したがソ連軍の反撃を支えきれず、12月初めにこれを放棄した。

バルバロッサ作戦は、1941年末の段階で北方軍集団がレニングラード外縁、中央軍集団はモスクワ前面、南方軍集団はセバストポリとロストフ前面において遂に攻勢終末点に達して頓挫した⁽²⁵⁾。

4 電撃戦の限界と終焉

こうして、第二次大戦前半を特徴付けるドイツの電撃戦は「バルバロッサ作戦」の未達成によって不完全な形で終わった。その原因はドイツの兵力不足、兵站補給力の限界、ロシアの冬の想像を

超える厳寒等が考えられる。しかし、それより大きな原因は、昭和日本陸軍の鬼才で戦略家の石原莞爾がその著書『戦争史大観』の中で、短期決戦を指向する決戦戦争を企図しながらも持久戦争へ移行せざるを得なくなる三つの理由の中の第三の理由である「軍隊の運動力に比し戦場が広い場合」に相当している⁽²⁶⁾。すなわち装甲機動戦を得意とするドイツ軍にとってさえも、その軍の運動力に比べてロシアの戦場は余りにも広大であり、その広大な空間がドイツ軍の運動力と攻撃衝力を吸収したと考えられる。こうしてドイツが企図した史上最大規模の電撃戦「バルバロッサ作戦」は失敗したのである。

バルバロッサ作戦の翌年の1942年春、ヒトラーは第2次ソ連侵攻作戦を企図し、4月5日付ヒトラー指令第41号によって、ドイツ東部作戦軍に対して作戦準備を命じた。東部作戦軍は6月28日、その作戦計画に基づき南方軍集団をもってドネツ・ドン地域のソ連軍の覆滅とコーカサス油田地帯の占領を目的とする東部戦線での二度目の電撃戦である「青作戦」を開始した。7月に入り南方軍集団は、A、B 2個軍集団に改編され、この任務を遂行させることにした。しかし、この「青作戦」は、前年の大規模な電撃戦であったバルバロッサ作戦とは異なり、ロシア南部に作戦地域を絞った限定的な電撃戦であった。それはドイツの戦争継続能力を維持するためにウクライナ穀倉地帯とコーカサス油田地帯の確保を目的としていた。バルバロッサ作戦とは異なるこれらの作戦目的から判断して、既にドイツの対ソ戦は、この時点で敵野戦軍の殲滅を主目的とする決戦戦争から持久戦争への移行過程に入ったと推測される⁽²⁷⁾。

8月初めドン河以西のソ連軍は大した抵抗もせず東岸に後退し、ボルガ河沿いの戦略要衝スターリングラードが独ソ両軍の決戦場となった。B軍集団の中核である第6軍は、スターリングラードへ突進し、9月中旬には市街へ突入した。10月末まで激しい市街戦が続いた末にドイツ軍は市街の大部分を制圧し、ボルガの戦闘はドイツ軍の勝利に帰すかに見えた。しかし、11月初めソ連軍は第6軍の南北に展開する脆弱なルーマニア軍戦線を突破して第6軍を完全に包囲した。ド

イツ側は完全にその弱点を突かれる形になった。第6軍は翌1943年1月まで奮戦したが、第6軍司令官パウルス元帥はソ連軍に降伏した。この戦闘の敗北によってドイツは東部戦線の主導権を失い、再びソ連軍に対する電撃作戦による攻勢は不可能となった⁽²⁸⁾。

1943年2月18日、ドイツ第6軍が降伏したその約2週間後に、ドイツ国民啓蒙・宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッベルスは、ベルリンで後に「総力戦布告」と呼ばれる歴史的演説を行なった。ゲッベルスは、スポーツ宮殿に集まった聴衆を全ドイツ国民の代表として、10の質問を投げ掛け、最後に「諸君は、総力戦を欲するか。戦争の重荷が国民に平等に与えられる事を望むか。」と問い、聴衆の“Ja”の斉唱に「国民の代表である諸君の答えで、ドイツ国民の決意が世界に宣言された」と結んだ。この時点でドイツ国民は世界に国家総力戦を宣言したというのであった⁽²⁹⁾。凶らずもこの時点でドイツの電撃戦による戦争形態はスターリングラードの敗北によって破綻し、国家の全資源、全国力を投入して戦う長期大量損耗の国家総力戦へ移行したのである。

ドイツは、国家総力戦を避けるべく電撃戦をもって第二次大戦を開始したが、その電撃戦の行き詰まりによって、国家の経済力、工業力、技術力、精神力を総動員した国家の全力を奮って戦う国家総力戦に移行し、しかもその戦争の規模、様態は、かつてルーデンドルフが『国家総力戦⁽³⁰⁾』で示した予想を遥かに超えていた。戦闘にはもはや軍人も一般市民の区別もない、また前線と銃後の区別もない国民すべてが攻撃の対象となる文字通りの「国家総力戦」となったのである。これこそが電撃戦の限界であり、終焉であった。

おわりに

大衆政治運動であるナチスの政治イデオロギーからすれば、国民総動員のナチ人民軍の創設と国家総力戦の遂行が当然の帰結であった。ヒトラーが、それに指向する旧来の同志であるレームをはじめとする突撃隊首脳とシュトラッサー等のナチ党左派を粛清してまでも、国防軍をドイツ唯一の

武力組織として認め、戦車、航空機、重砲等で武装し、高度な専門的訓練によって鍛え上げられた少数エリート部隊の職業軍を支持したのは、ヒトラーのナチ党内の左派打倒の権力闘争の結果のみならず、精強エリート職業軍による装甲機動戦、すなわち電撃戦の遂行こそが次の戦争での勝利の鍵であると確信したからである。そこにはヒトラー自身の第一次大戦での苦しい塹壕戦の戦場体験が少なからず影響しているし、旧体制を打破して成立した新しい第三帝国にふさわしい新しい軍事戦略は、第一次大戦型の総力戦指向ではない戦車、装甲部隊と空軍が遂行する高速機動戦、すなわち電撃戦こそが国民にアピールでき、最もふさわしいと考えたからであった。またそれは、次の戦争を装甲機動戦で短期に勝利に導くことを主張するドイツ国防軍内の電撃戦推進派の構想と完全に符合するものであった。

註

- (1) ピーター・パレット編『現代戦略思想の系譜』（ダイヤモンド社、1989年）507-514頁。
- (2) Cajus Bekker, *Angriffshöhe 4000*, Oldenburg 1972, S.36-43.
James S. Corum, *The Luftwaffe*, Kansas 1997, S.182-223.
- (3) 田中賢一『現代の空挺作戦』（原書房、1986年）24-32頁。
- (4) Len Deighton, *Blitzkrieg*, London 1993, S.97-176.
J.E. & H.W.Kaufmann, *Hitler's Blitzkrieg Campaigns*, Pennsylvania 1993, S.11-26.
- (5) Dirk.W.Oetting, *Auftragstaktik*, Frankfurt a.M.1993.
James S. Corum, *The Luftwaffe*, Kansas 1997, S.166-181.
- (6) Adolf Hitler, *Mein Kampf*, München 1943, S.748.
- (7) Hitler *Reden und Proklamation 1932 bis* 1945, Leonberg 1988, Band I ,S.280-209.
- (8) 折口透『ポルシェ博士とヒトラー』（グランプリ出版、1988年）139-160頁。
- (9) Christian Zentner and Friedemann Bedürftig, *The Encyclopedia of the Third Reich*, New York 1991, S.56-58.
- (10) Zentner, a.a.O., S.634-635.
- (11) James S.Corum, *The Root of Blitzkrieg*, Kansas 1992, S.1-50.
- (12) Corum, a.a.O.,S.51-96.
- (13) Heinz Guderian, *Erinnerungen eines Soldaten*, Neckergemünde 1960, S.13-19.
- (14) Heinz Guderian, *Achtung-Panzer !*, London 1996, S.72-74, 111, 141, 191.
- (15) バジル・リデル・ハート『近代軍の再建』（岩波書店、1944年）74-96頁。
- (16) J.F.C.Fuller, *Armored Warfare*, Harrisburg 1943, S.2-13.
- (17) Heinz Guderian,*Erinnerungen eines Soldaten*, Neckergemünde 1960, S.23-24.
Wolfgang Fleischer, *The Wehrmacht Weapons Testing Ground at Kummersdorf*, Atglen 1997, S.46-48.
- (18) Guderian, a.a.O.,S.25-30.
- (19) Guderian, a.a.O.,S.30-32, 40-52.
- (20) Deigton, a.a.O.,S.68-75.
Kaufmann, a.a.O.,S.65-104.
Janusz Piekalkiewicz, *Polen Feldzug*, Herrsching 1989, S.73-267.
Steven Zalga &Vitor Madej, *The Polish Campaign 1939*,New York 1985, S.103-130.
- (21) Guderian, a.a.O.,S.56-78.
- (22) Deigton, a.a.O.,S.177-276.
Kaufmann,a.a.O.,S.173-314.
Alistair Horne,*To Lose A Battle-France 1940*, London 1990, S.184-662.
Hans-Adolf Jacobsen, *Fall Gelb*, Wiesbaden 1957, S.9-153.
Erich von Manstein, *Verlorene Siege*, München 1976, S.61-171.
- (23) Manstein, a.a.O.,S.61-171.
- (24) Deigton, a.a.O.,S.177-276.

- Kaufmann, a.a.O., S.173-314.
- Alistair Horne, To Lose A Battle-France 1940, London 1990, S.184-662.
- Hans-Adolf Jacobsen, Fall Gelb, Wiesbaden 1957, S.9-153.
- Janusz Piekalkiewicz, Ziel Paris, Herrsching 1986, S.116-220.
- (25) Paul Carell, Unternehmen Barbarossa, Frankfurt a.M.1963. S.195-272.
Vgl. Alan Clark, Barbarossa, New York 1985.
Bryan I. Fugate, Operation Barbarossa, Novato 1984.
Alfred Philippi und Ferdinand Heim, Der Feldzug gegen Sowjetrußland, Stuttgart 1962.
- (26) 石原莞爾『石原莞爾資料－国防論策篇－』（原書房，1994年）231頁。
- (27) 石原莞爾『最終戦争論・戦争史大観』（中央公論社，1993年）32－34頁。
- (28) Vgl. Paul Carell, Stalingrad, Berlin 1992.
Manfred Kehrigh, Stalingrad, Stuttgart 1974.
V. E. Tarrant, Stalingrad, London 1992.
- (29) Joseph Goebbels, Tagebücher 1924-1945. München 1992, S.1898-1900.
Vgl. Willi Boelke (Hrsg.), Wollt Ihr den totalen Krieg ?, Stuttgart 1967.
- (30) エーリッヒ・フォン・ルーデンドルフ『國家總力戦』（三笠書房，1938年）。
- Corum, James S.: The Luftwaffe, Kansas 1997
- Deighton, Len: Blitzkrieg, London 1993
- Fleischer, Wolfgang: The Wehrmacht Weapons Testing Ground at Kummersdorf, Atglen 1997
- Fugate, Bryan I.: Operation Barbarossa, Novato 1984
- Goebbels, Joseph: Tagebücher 1924-1945, München 1992
- Guderian, Heinz: Erinnerungen eines Soldaten, Neckergemünde 1960
- Guderian, Heinz: Achtung-Panzer!, London 1996
- Hitler, Adolf: Mein Kampf, München 1943
- Hitler Reden und Proklamationen 1932 bis 1945, Leonberg 1988
- Horne, Alistair: To Lose A Battle-France 1940, London 1990
- Jacobsen, Hans-Adolf: Fall Gelb, Wiesbaden 1957
- Kaufmann, J.E. & H.W., Hitler's Blitzkrieg Campaigns, Pennsylvania 1993
- Kehrigh, Manfred: Stalingrad, Stuttgart 1974
- Manstein, Erich von: Verlorene Siege, München 1976
- Philippi, Alfred und Ferdinand Heim: Der Feldzug gegen Sowjetrußland, Stuttgart 1962
- Piekalkiewicz, Janusz: Polen Feldzug, Herrsching 1989
- Tarrant, V.E.: Stalingrad, London 1992
- Zalga, Steven & Vitor Madej: The Polish Campaign 1939, New York 1985
- 石原莞爾『最終戦争論・戦争史大観』（中央公論社，1993年）
- 石原莞爾『石原莞爾資料－国防論策篇－』（原書房，1994年）
- 折口透『ポルシェ博士とヒトラー』（グランプリ出版，1988年）
- ピーター・パレット編『現代戦略思想の系譜』（ダイヤモンド社，1989年）
- エーリッヒ・フォン・ルーデンドルフ『國家總力戦』（三笠書房 1938年）

参考文献

- Bekker, Cajus: Angriffshöhe 4000, Oldenburg 1974
- Boelke, Willi (Hrsg.): Wollt Ihr den totalen Krieg ?, Stuttgart 1967
- Carell, Paul: Unternehmen Barbarossa, Frankfurt a.M.1963
- Carell, Paul: Stalingrad, Berlin 1992
- Clark, Alan: Barbarossa, New York 1985
- Corum, James S.: The Root of Blitzkrieg, Kansas 1992

本論文は、平成28年度日本大学国際関係学部
個人研究費及び平成29年度日本大学海外派遣研
究者（短期B）の成果に依る。